

難治性狭心症に開発中の冠静脈洞径縮小デバイスが有効

血行再建術が適応とならない冠動脈疾患患者の多くは、標準的な薬物治療を行っても難治性狭心症をきたす。新たな治療選択肢として冠静脈洞径縮小デバイスが開発されている。これはバルーンカテーテルに装着されたステンレス製の砂時計のような形状のデバイスで、限局的に血管腔を狭めることによって内圧が上昇し、虚血心筋に血液が再供給されるというものである。本研究では、この新たなデバイスの安全性と有効性について検討した。

カナダ心臓血管学会（CCS）分類のクラスⅢまたはⅣの狭心症と心筋梗塞を有し、血管再建術が適応とならない患者 104 例を、本デバイスを留置する群（52 例）と疑似的処置を行う群（対照群；52 例）にランダムに割り付けた。その結果、6 ヶ月時に CCS 狭心症分類で 2 度以上の改善率は、デバイス群が 35% となり、対照群の 15% に比べ有意な改善がみられた（ $P=0.02$ ）。1 度以上の改善についても、デバイス群が 71% と、対照群の 42% に比べ有意に良好であった（ $P=0.003$ ）。狭心症に関連した生活の質（QOL）をシアトル狭心症質問票で評価したところ、デバイス群で 17.6 点の改善となり、対照群の 7.6 点よりも有意に改善した（ $P=0.03$ ）。運動負荷試験での平均運動時間およびドブタミン負荷心エコー検査での壁運動指数については、有意な差は認められなかった。6 ヶ月時には、デバイス群で 1 例が心筋梗塞を発症し、対照群では 1 例が死亡、3 例が心筋梗塞を発症した。

今回の研究は小規模ではあるが、冠静脈洞径縮小デバイスは、血行再建術が適応でない難治性の狭心症患者の症状および生活の質を有意に改善することが示された。

出典：The New England Journal of Medicine. 2015; 372(6): 519-527